水明インターネット句会（選句・選評）　令和六年十一月

1	ひろし 凡士	柿の実や烏鳴き合ひ喰ひ落とす 晩秋の鄙の郷の景を描きだしている。	朝香
2		神在月神楽殿で愚痴を聞く	一駄歩
3		右左眇でじつと冬銀河	傘張浪人
4	のり子 蝸牛 暮風 癒香 破れ蓮	水音の玲瓏として冬に入る 何気ない冬の光景が愛しい。冬の凛とした空気が伝わる。緊張感と清々しさが感じられます。顔をかんばせと詠ませるのが絶妙。冴え冴えとした水音が聞こえるようである。	松田素風
5	雅明	臥待月酒を片手に君と吾と 土間のままだった頃の厨は、冬の朝は厳しい寒さでした。その頃のことを思い浮かべて読みました。	遼臥
6		山茶花や扇子ふりふりお立ち台	森　佳月
7		優勝旗かかげて叫ぶラグビー部	邦治
8	鈍幹 総太郎	米研ぎし手のひび割れや冬の朝	陸人
9	佳月 一駄歩 総太郎	年寄りの海老寝極まる夜寒かな 自然と背中が丸くなってきますね。しみじみとわかる。	高原ひろし
10	素風 破れ蓮	行合の空昏くして初時雨 「行合」という措辞が素晴らしい。冬への移ろいをうまく捉えている。	安田蝸牛
11	幹子 六弦様 月を	抱き上げてミルクのにおい葡萄棚 葡萄棚の下で、抱き上げてよく葡萄を見せて上げたいと抱っこした、情景が浮かんできました。こんな時が一番の幸せなのかも。然もありなん、です。	ありぎりす
12	俳爺 楽	菊談議とどのつまりは菊自慢 前座（菊談義）から真打（菊自慢）への流れを面白く詠まれた。菊談義と菊自慢の対比に持っていかれました。	衛
13		夕闇の背戸に早ばや虫の声	幸子
14	浪人 傘張 道を	流行歌まちに流れて冬に入る 軽妙なところが絶妙です。	新井のり子
15		山茶花をつんつん次々登校子	しーしー

水明インターネット句会（選句・選評）　令和六年十一月

16	喜夫	老友の頻りに訪ひ来る神無月	秋が深まり、集まりが頻繁になり、昔話に花が咲く、終活の一端か？	瞳人
17		露の世や瑠璃光院の床もみぢ		光雲2
18		カシミヤの凩防ぐ編み目かな		雪待月田猫
19	梗舟	小春日や井戸端ならぬドッグカフェ	井戸端ではなくそこですか！	秋谷風舎
20		猫たちの空地つぶれて秋の風		横井あらか
21	素風	石走る水に浮かべる散紅葉	谷川を流れていく紅葉が見えるようだ。	破れ蓮様
22	朝香	爽籟や名も知らぬ実を揺らしをり	爽やかな秋を感じる美しい句です。	みづる
23		樽酒を振る舞う酒屋秋祭り		和田イチ子
24	瞳人	散紅葉姉を見送る無人駅	どこへ行く姉なのかなあ。	いさむ
25	佳月　一駄歩 ことは　絵夢 彩香　鶴城 允孝　楽 癒香	ねんねこや赤子指より眠りだす	指よりが良いですね。「指より眠りだす」・・・いい言葉です。浮かぶ情景に甘やかな幸福感と温度まで感じる。よく観察されています。赤ちゃんは指から眠りますね。赤ちゃんを寝付かせている様子がよく描写されていて、「指より」がいいと思いました。ねんねこの温かさに指吸いが外れて寝入るを知る何ともほっこりします。指の暖かさが伝わってきます。乳児の指がゆれる様が微笑ましく、着眼点がいい。「指より眠り出す」やられました。	荒一葉
26	春水 しんい ひろし	竹林に消ゆる人力初時雨	竹林と人との関わり合いがよく表現されている。竹林と時雨がいかにも京都らしい。	新　暦文
27		道草の外湯巡りの湯冷めかな		大越マーガレット
28	マスミ	竹の春黒木鳥居はただ静か	京都嵯峨野の野宮神社の黒木の鳥居。野宮神社は、平安の頃は伊勢神宮の斎王に選ばれた皇女が潔斎のために籠った神社。今はただただ静まり返っている。その静寂が高貴な雰囲気を醸し出している。	岩清水彩香
29	一駄歩	新札の渋沢吊し小熊手	今年はありそう。	ひろ志
30	順一	懐かしき悲しきリズム冬の蝶	秋に比べて確実に少なくなっているのですが、冬の蝶は独特なリズムがあるのかもしれません。	松橋春水

水明インターネット句会（選句・選評）　令和六年十一月

31	血涙や善知鳥の浦に母啼けり 今でも夜回りが続いていることに感心します。子どものころに火の用心の夜回りしたことが浮かんできます。	允孝	網野月を
32	寒柝の音を奪ふや救急車	允孝	立野音思
33	軒並みに大根干すや鄙の里		俳爺
34	鵙の鳴き草木の陰に染み渡り		山川充
35	里山の色を消しゆく秋時雨 視線を変えて句に奥行きあり。秋の時雨に煙って静まりゆく里山の景が見える。冬の訪れを予感させる秋時雨ですね。里山の柿の木や厨からの煙や　全てをグレーに変える静けさがいいですね。雨にけぶる薄暗い里山の、しんとした遠景が目に浮かびました。晩秋の里山も一雨ごとに落葉して冬を迎えます。	のり子　ひろ志 荒一葉　道を ことは 大越 ひろし あらか	小林土璃
36	紅葉且つ散る築山や宵フェスタ 目の前に情景がはっきりと浮かびます。	梗舟	しんい
37	あいまいな冬の入り口十一月 十一月を揶揄してユニークな詠みである。暑から寒の境目の「あいまい」の表現が秀逸。	俳爺 絵夢	くるみ
38	待ち侘びし彩る木々よ秋の暮		癒香
39	母の踏むミシンのリズム山装ふ		河野凡士
40	どっしりと姿ゆるがぬ秋の山		大束暮風
41	初舞台古希の顔（かんばせ）天高し 緊張感と清々しさが感じられます。顔をかんばせと詠ませるのが絶妙。	癒香	絵夢
42	凩や研ぎたる空の蛾眉の月		後藤允孝
43	我が足は巨人の足よ＆#３４６９５；		龍野ひろし
44	ロッカーの陰で肉饅半分こ 「ロッカーの陰で」ということは正規のおやつじゃないのでしょうが、「半分こ」に微笑ましいあたたかさを覚えました。こっそり食べると、なおおいしい。	あらか しーしー	染谷風子
45	冬晴の壁一面にヘップバーン 立ち止まってしまいますね。	ことは	石関六弦

水明インターネット句会（選句・選評）　令和六年十一月

46		鬼の子や鎧を重ね籠る軒	鈍幹
47		枯蟷螂後期高齢皆盛ん	青木鶴城
48		払暁に待ち人来たり霜柱	岡崎梗舟
49	荒一葉 鈍幹 月を	石蕗の花彩なき庭のほの灯り 彩の少ない庭に石蕗の黄色い花が灯のように明りを点す様子がよく詠まれている。好きな花であり、慰めの花です。	佐藤幹子
50		七五三湯築城あとに子規笑ふ	持永喜夫
51	山菜	少子化を柳葉魚食らひつ考える 卵を抱いたシシャモに教えられることあまた。うれしいねえ。美味しいねえ。	平野楽
52	山菜 六弦様	すれ違う神の子人の子千歳飴 「神の子人の子」にびっくり。神の子も千歳飴の袋をさげていたとは。お詣りを終えた子は神になっているのかも。	霜里
53		月冴えて爺はコーヒーポットから	総太郎
54		黄落やベンチの二人黙通す	ひでこ
55	春水	檸檬齧り「さあ！行くぞ」と後半戦 自分自身に喝を入れてるんでしょうか。爽やかでいい表現です。	丸山マスミ
56		爛酒を慕いてくぐる暖簾かな	富沢恵
57	暮風 傘張浪人	塾帰り孫に傘さす秋時雨	寒立馬
58	春水 六弦様	押しくら饅頭ほどほどにして嫁に来い お嫁さんと子供たちが遊んでいるんでしょうか。ほのぼのしている様子が伝わってきます。滑稽味ある楽しい句ですね。	森下山菜
59		綾取りの娘（こ）に教へらる冬浅し	岡本たか子
60		小春日や出るに出られぬ生配信	かげろう

水明インターネット句会（選句・選評）　令和六年十一月

61		眠らぬ大都会狼はいづこ	日髙道を
62		冬の月文房具箱を整理して	石川順一
63		七五三亀とはしゃいであめどうぞ	一駄歩
64	彩香	末枯や低く行け行けフリスビー 季語を大切にされ、対比には明るい躍動感。	傘張浪人
65	凡士	冬うらら目移りするや陶器市 目移りするどころか目がくらくらするしまい弘法。	朝香
66	瞳人	手術前ベッドで観ている下弦かな もう腹決めて、まかせよう。	遼臥
67	ひでこ 風舎 幹子 ひろ志 風子	虎落笛寝たきり妻の痰を引く 妻の痰を引く夫の優しさを感じます。虎落笛の季語がぴったりです。老々介護お疲れ様です。愛情がうかがわれる。奥さまに対する愛情を痛切に感じます。どうぞお大事に。老老の自宅介護、ご夫婦共にのご苦労です。季語「虎落笛」が効いている。無情な虎落笛が作者の心を苛む。	森　佳月
68	璃土 雅明 蝸牛 鈍幹	托鉢の笠の雫や片時雨 笠の雫」が修行の厳しさをよく伝えている。修行僧の直向きで覚悟を決めた姿勢を感じました。日照雨に佇む托鉢僧が見える。	松田素風
69	雅明	熱き湯に仕事納めの身を沈め 忙しかった一日の充実した気持を感じる句です。	陸人
70	喜夫	肌寒み手の甲さする一歩かな 萩の花の包容力が命の循環を表現する「抱きこぼるる」が良いですね	高原ひろし
71		冬ざれや被災の能登の過疎進む	邦治
72	璃土 恵 山菜 暮風 順一	髪梳けば木偶に魂入る村芝居 木偶の生き生きとした演技、一句の中に「村芝居」という季語が生きている。文楽の人形の魂の入った表情を思い浮かべた。抱いていたデクが急に動き出したとは、村芝居も相当なもんだ。梳られた神は魂を宿したのかもしれません。	ありぎりす
73	総太郎	一陣の風の憎さよ落葉掃く	衛
74	破れ蓮	凩の研ぎ澄ましたる眉月かな 美しい冬の月が想像される。	安田蝸牛
75		冬ばれの陶器の市を杖歩く	新井のり子

水明インターネット句会（選句・選評）　令和六年十一月

76		葉が二枚すがる枯木にモンスーン	しーしー
77	喜夫	雨雫抱きこぼるる萩の花 萩の花の包容力が命の循環を表現する「抱きこぼるる」が良いですね	幸子
78	土璃	隅田川暮色へ染まる都鳥 日本人にとって定番の光景。	光雲2
79	しーしー	霜柱踏むやアトランティスのごと 大陸が瓦解する音がします。	雪待月田猫
80		いかがかと三冬がそつと根深汁	瞳人
81		朝顔のまだ咲く坂を駆ける足	横井あらか
82		短日の籬の陰やししおどし	秋谷風舎
83		戻り来よ彼の日の紅葉かの言葉	みづる
84		路線バス柿豊作や茜さす	和田イチ子
85	素風 しんい 蝸牛 田猫	神妙な顔も刹那の着袴の儀 腕白な児の様子が見える。五歳の男の子のお祝い、凛々しさも束の間の現代っ子。やんちやな男児の姿が目に浮かぶ。かっこいい袴を着せてもらい、誇らしげな顔が浮かぶ。	破れ蓮様
86	幹子 暦文 佳月 瞳人 楽 くるみ あらか ひでこ	子の悩み聞く湯豆腐の箸止めて ほのぼのとした家族の夕食が浮かぶ。子の悩みと湯豆腐の取り合わせが絶妙。おやじよ、ゆっくり聞いてやれ。湯豆腐鍋を挟んだ親子団らんの様子がよくわかると思いました。箸を止めて話を聞き入る親御さんの姿勢に拍手です。これ季語が湯豆腐だから親子の関係が美しいんだろうな。仮に鋤焼だったら悩みより肉が優先されて親子喧嘩になりそう。湯豆腐から親の暖かさが伝わり、ほんわかとしました。子どもさんから悩みを打ち明けられたのでしょうか。湯豆腐の暖かな雰囲気が悩みを打ち明ける好機会だったのでしょう。	荒一葉
87	大越 朝香	大和路にどかっと座る藁ぼっち 大和路の長閑な景色に楽しくユーモラスな藁ぼっち　藁ぼっちは季語でしょうか？秋の日のゆったりとした景が浮かびます。「どかっと」が効いてます。	新　暦文
88		菊展示老人達の自慢会	いさむ
89	かげろう	新米のおむすび母のええ塩梅 実母の握るおにぎりが一番口に合うものです。	岩清水彩香
90	荒一葉 傘張浪人	ねんねこの児よりお釣の二十円 ねんねこから幼子がお釣りを渡す様子が微笑ましい。	ひろ志

水明インターネット句会（選句・選評）　令和六年十一月

91		粕汁や食はず嫌ひが箸を付け	大越マーガレット
92		目が合ひて鑑と思ふ穴惑	網野月を
93		身震ひて寒夜の帰宅星ひとつ	立野音思
94	ひでこ	三日月や尖る方より鮫齧る 三日月のあの細い先っぽを齧りたいと思う気持ちよくわかります。鮫をもってきたのが面白い。	松橋春水
95		爽涼や父母ケ浜（ちちぶがはま）の水かがみ	山川充
96	ひろし 恵	凩や風の形の古木立つ 裸木となった古木が風に大きく揺れている情景が浮かんだ。「凩」と「風」を並べた視覚的効果も良いと思った。	小林土璃
97	のり子	尼様の箒困らす濡れ落葉 観察眼の妙。	俳爺
98	マスミ 田猫	鳩鳴いて夕暮れの色深まりぬ 「鳩の海」と言えば、琵琶湖。束の間の夕暮れの景色の深まりが何とも趣深い。景色の広がりと感慨。映像が美しい句。	くるみ
99		蔓荔枝苦味も旨味美味なりて	癒香
100		かぎ編みのセーター習ふ昼下がり	しんい
101	風子	その赤は命の色か実南天 赤は燃え滾る命の象徴か。	大束暮風
102	恵 マスミ	ビーナスも仮面も土偶冬暖か 豊穣への祈りや子孫繁栄への願い。遥か昔も今も変わらぬ人間のあり方、姿に思いを馳せての「冬暖か」に共感した。作者は縄文時代人々の豊かな感性と芸術性に魅せられその余韻に酔いながらの帰宅であったかと思われる。	河野凡士
103	香 越 大 ひろし たか 月を	踏み減りし磴の窪みの木の実かな 切取られた情景への観察眼に写生を感じる。大和路の長閑な景色に楽しくユーモラスな藁ぼっち　藁ぼっちは季語でしょうか？。古寺の石段であろう。磨り減った窪みに木の実がのっている。細かいところに目の届いた良い句であります。「窪み」が良いです。	後藤允孝
104		歩き疲るる月光に誘はれて	龍野ひろし
105		観覧車ライトの紅葉街覆う	絵夢

水明インターネット句会（選句・選評）　令和六年十一月

106　しーしー　風子　鶴城

週末に彼氏来るよと空つ風

いかにも空つ風のような娘。空つ風もある時は粋なキューピットに。空つ風ガ意味深で興味深い句。

石関六弦

107

石鉢や綻ぶ石蕗（つは）の花のもの

鈍幹

108

もつ焼きに柚味噌たっぷり屋台酒

染谷風子

109　暦文　俳爺　しんい　ひろし

奥能登に春待つ調べ駅ピアノ

早い復興を願う。下五の駅ピアノが良い。七尾駅のピアノだろうか。誰が弾くのか心地よく、勇気をもらう調べが被災地を見舞う。今度こそ本当の春が来てほしいものです。

岡崎梗舟

110

駐在所のフェンス占拠や葛の花

佐藤幹子

111

諍いを厭はぬ国よ露凍る

青木鶴城

112

背を伸ばしゴミ捨てにゆく今朝の冬

そういえば似ているが、いまの私は子持ちではなくなっている。そう言われて見ればそう見えないこともないですね。そう言われて見ればそう見えないこともないですね。

富沢恵

113　凡士　順一

ふくらはぎに似ている子持柳葉魚かな

若人よ、大都会でオリオンの如く勇壮に生きよ。マクロとミクロの対比とテンポの良さが心地よい。

平野楽

114　風舎　絵夢

オリオンよ空狭き街を踏んで行け

霜里

115　田猫

都落ち四万十懸かる寒の月

都会の喧騒が恋しい静かな夜。新生活を月が見守る。

持永喜夫

116　暦文　かげろう　朝香　鶴城

モノクロの黒澤映画芋かじる

特に、若き日の三船、仲代、山崎努が好演した天国と地獄を思い出す。白黒の名作映画を見たくなることってありますよね。さつま芋をかじりながら、懐かしい黒沢の時代劇でも見ている。いいですね。「芋かじる」が絶妙。

ひでこ

117　允孝　たか　梗舟　かげろう

秋深し揺りかごと化す終電車

終電車は乗越があると戻りの電車はないですが、本当に帰りの電車はよく眠れます。上五の秋深しがいいですね。座席には仕事疲れの人、酔っ払いなどが居眠りしている。終電車の面白い光景を捉えている。ゆりかごがいいですね。紅葉狩りでも満喫した後でしょうか？空き深まる頃の程よい暖房は眠りを誘います。

丸山マスミ

118

失職にさせた議会と知事の冬

総太郎

119

河豚食うて地獄の赤い水を掻く

森下山菜

120

慎ましく庭影ほのかつ石蕗の花

寒立馬

水明インターネット句会（選句・選評）　令和六年十一月

121　たか

冬めいてまた数減りしクラス会

恒例のクラス会、今回も又参加者が減った。皆年老いてきたのだ。悲哀を感じる。

かげろう

122

今年なほとどかぬ高さ烏瓜

岡本たか子

123

寒さ増し短歌の暗記に努めたり

石川順一

124　くるみ

長き旅路終へ独り熱燗注ぐ

やや散文的ですが、我が家に帰って来てホッとした気持ちに共感しました。

日髙道を

125　道を

ねんごろに唱へる祝詞神の留守

神の留守の季語が効いています。

桧鼻ことは

126　くるみ　風舎ひろ志

山茶花や古刹の僧の竹箒

簡潔明瞭な句、「古刹」から様々な景が立ち上がってきます。清々しい気持ちになった。散った山茶花を掃く老僧の姿が見える。

桧鼻ことは